
意外な殺人鬼

上杉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

意外な殺人鬼

【コード】

N9301M

【作者名】

上杉

【あらすじ】

修学旅行ではぐれた3人。そこで死体を見つける…が、ここで…

とりあえず私は身を隠した。

連続殺人鬼に命を奪われないように。

震える手を何とか抑えて、何処かの空き家の大きな箱に一人寂しく身を潜めている。

友達は死んでいるのか、生きているのか、未だにわかっていない。

「あの時拓也達とはぐれなければ…今頃どうしてるんだろう…」
そうとしか思っていなかった。

すると急に電気が点いた。

「!?!」

とても驚愕した。

寒気がした。

何とか声は漏れてないようだ。

酷く物音がする。

何かを探しているようだ。

(ま、まさか私を探しているんじゃないだろうか！他の友達は既に殺されていて、残りのターゲットは私だけなのでは…と、兎に角警察に電話しよう！しかし声を元に私を嗅ぎ付けるんじゃないか…などと思っていた。)

(よし、犯人に見つからなければ、即警察に電話しよう。)

すると、運良く電気が消えた。

それから30分は経っただろう…でも感覚がわからないから1時間かもしれない。

すると、私は手探りで携帯電話と取り出した。

「よし、電話しよう。」

すると…

「け、圏外…くそ…こういう時に限って…」

私は声を発していた。

更に、運が悪かったのか、身を潜めていた箱が開いて、光が漏れてきた！

そして恐る恐る目を開けた。

これは、私達が高校2年生の時の修学旅行で、神室村へ行った時の話である。

私は親友の拓也と知子、私こと優香の3人グループで活動していた。すると、拓也が言った。

「あっちの方も行ってみようぜ。」

すると、知子が

「え？山奥に入ったらいけないと先生が事前に……」

そう聞くと、私は軽い感じで答えた。

「いいじゃん。ちよっとぐらい。楽しそうだしさー」

「え？……」

私と拓也に促されて、知子は嫌な顔をして、3人で入っていった。近くにいた先生も気づいていなかった。

大分奥に入っていくと、知子が、

「ねーねー……そろそろ戻ろうよ……」

「そうだな、何にもねえから帰ろうか。」

すると私はとんでもないものを発見した。

「ギヤアアアアアア……」

「ど、どうした!？」

「ここ……ここ……した……いが……」

「ん？何だつて？」

殆ど聞こえていない。

「し、死体が……!!」

「ん？………うわああ……!!」

「逃げましょう!ここは危険だわ」

「う、うん」

異口同音に言った。

すると背後から何者かが私達を殴り倒した！

「ん…んぐ…（ここは何処？）」

何処かの洞窟にいる。

「（そう言えば殴り倒されたんだっただな）ん…いてえ…後頭部を強打されてる…友達は近くに居ないか…はぐれたんだなきつと……！
！彼処に一軒家がある…入ってみよう。」

そして私は暗い家に侵入した。

とりあえず私は身を隠した。

連続殺人鬼に命を奪われないように。

震える手を何とか抑えて、何処かの空き家の大きな箱に一人寂しく身を潜めている。

友達は死んでいるのか、生きているのか、未だにわかっていない。

「あの時拓也達とはぐれなければ…今頃どうしてるんだろう…」
そうとしか思っていなかった。

すると急に電気が点いた。

「!?!」

とても驚愕した。

寒気がした。

何とか声は漏れてないようだ。

酷く物音がする。

何かを探しているようだ。

（ま、まさか私を探しているんじゃないだろうか！他の友達は既に殺されていて、残りのターゲットは私だけなのは…と、兎に角警察に電話しよう！しかし声を元に私を嗅ぎ付けるんじゃない…）
などと思っていた。

（よし、犯人に見つからなければ、即警察に電話しよう。）
すると、運良く電気が消えた。

それから30分は経っただろう…でも感覚がわからないから1時間

かもしれない。

すると、私は手探りで携帯電話と取り出した。

「よし、電話しよう。」

すると……

「け、圏外……くそ……こういう時に限って……」

私は声を発していた。

更に、運が悪かったのか、身を潜めていた箱が開いて、光が漏れてきた！

そして恐る恐る目を開けた。

「た、拓也！……ど、どうしたの？」

「それは後で言う。とりあえずこっちだ！今度こそあの殺人鬼に命を奪われるぞ！」

「う、うん……てか知子は？」

「いや、俺も知らない。俺は何故か洞窟の近くに居たからな。犯人の狙いは多分知子だろう。どっかに監禁してあるかもしれないな。」

「そっか……あの人のように殺されていないかな……」

「兎に角ここは危険だ。奴が来るかもしれない。早くあの先生から解放された草村に戻ろう！」

「う、うん」

「よし、行くぞ！」

「警察に電話するか？飯田先生」

一人の先生が言った。

「いいや、まだしなくていいだろう……」

「そうだな。もうちょっと待ってみるか……そっぴや田中先生は！？」

「……それよりちょっと行くところがある。鈴木先生は先にホテルに」

「わかった」

「もう光が見えるぞ！」

「もう少しだね！」

「ハアハア」

もう二人とも息が切れていた。

しかし脱出しようと思っただけで、そんなのは思っていなかった。

ここである人物と遭遇した。

「い、飯田先生！」

「よかったー助かったー」

私はほっとした。

しかし拓也が…

「待て！優香！」

「ど、どうしたの？」

「もしかしたら飯田先生が犯人かもしれない…」

「え！？」

「なっ！なんで私が犯人なのかね」

「でもまだ事件が起きた…と言ってませんよね？どうして私が犯人

じゃないって言うてるんですか？」

飯田は焦慮した。

そして、3分ぐらい経過した。

「…ああ、そうだよ、俺が川村をやったんだ！」

「ま、まさか川村って川村先生！？シーツを被ってて誰だか良く分

からなかったんだけど…」

「そうだ！川村だよ！動機は生徒に最近暴力を振ってるらしいから、

そんな奴を俺の手で始末してやったのさ、そして死体をお前らに見

られたから鈍器で殴ってやったのさ」

「と、知子は何処？」

「それなら普段人が使わない家に閉じこめてある。」

「そ、そこって私達がさっきまでいたところ！？」

「そうかもな…」

「兎に角先生に言わないと…」

そうすると飯田は隠し持っていたナイフで自分の喉元まで持ってきた。

「な、なにしてる!」

「お前、先生失格だぞ!」

「ああ、そうかもな…」

そう言っつて飯田はナイフを落とした。

その後、警察が来て、飯田は逮捕され、知子は無事、みんなと合流した。

「知子、平気だった?」

「うん、何とか…」

「しかし先生が犯人とはな…油断できないぜ」

「よし、ホテル戻るか」

「うん」

こうして事件の幕は閉じた。

(後書き)

皆さん長々と読んでくれて有り難う御座いました。次回も書きます
と思うので、是非見てください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9301m/>

意外な殺人鬼

2010年10月11日12時59分発行